

実践報告

小規模校における「地域とともにある学校づくり」の開発研究 —カリキュラム・マネジメントと連携・協働体制構築の起点づくりを中心に—

岡崎 美佐子

滋賀県日野町立桜谷小学校 pi-ko0704@outlook.jp

要約：本稿は、少子化が進行する町立小学校で、自治体の所管全校へのコミュニティ・スクール導入を受けて、各校の特色を生かした「ふるさと学習カリキュラム」を改善する取組や、各校に設置される学校運営協議会で地域と学校がどのように連携し、児童生徒の学びと育ちに関わっていくかについて実際に行った実践開発の報告である。実践開発のポイントとして、「地域人材の授業参加と学習活動における協議の促進」に関わるカリキュラム・マネジメントの実践と、「公民館との組織的連携の確立」の実践により、学校と地域との連携・協働体制構築と熟議の契機を生み出すことを置いた。

キーワード

コミュニティ・スクール
カリキュラム・マネジメント
総合的な学習の時間
小学校・幼稚園・公民館の連携
協働ミーティング
郷土愛の醸成

1. 西大路小学校の概要

日野町立西大路小学校は、創立 150 周年を迎える歴史と伝統をもつ小規模校（児童数 83 名、8 学級）である。校区地域は山間部に位置し、自然環境が豊かである。農業が盛んであるほか、古墳や寺院などの史跡も数多く見られる。児童は日常のたて割り交流で全学年がつながっており、教員の同僚性も高い。町より地域学校協働活動を推進するために地域コーディネーターが 1 名配属され、授業への地域人材導入や地域との関係を維持向上させることに力を注いでいる。また登下校を見守る「スクールガード」には、保護者とともに地域の高齢者が参加している。このように同校には地域とともに子ども達を見守り育てていこうとする気風が存在している。

その反面、次のような課題も見られた。まず、地域との協働を生み出す「ふるさと学習」が 6 年間の系統性をもつカリキュラムとして定まっていないこと。次に、児童の持つ課題の多様性が認められること。そして小規模校ゆえの校務負担の重さから、児童の丁寧な見取り、教員同士の学び合いの機会が限定されていること。最後に地域の学校に対する関心と学校側の地域への関心の差異から、活動の慣習化と交流・協力関係が限定されることである。

2. 西大路小学校の改善プラン「わたむきプラン」の構想

現任校の課題を解決するための改善プラン「わたむきプラン」について、主要な先行事例から得られた知見をもとにその具体策を構想した。「わたむきプラン」の名称には、西大路のシンボルである「綿向山」を用い、未来という頂上を目指す子どもを育むという願いを込めた。地域の良さである伝統・文化・産業を大切にしながらもそれを生かした新しい学び方を工夫し、子ども達の将来を見据えた「生きる力」を育成するための学習活動に深化させることを重視した。学校と家庭・地域が地域学習を中心に連携・協働し、「西大路で育てていきたい子どもの姿」について思いや願いを出し合い共有・具体化する取組を改善プランの核とし、そのための 3 つの具体策（図 1）を連携カリキュラムづくり、授業における連携、熟議の場づくりで設定した。

(1) 地域連携・協働体制づくりにつなげるためにふるさと学習カリキュラムを再構築する

「学びの成果を実感できるカリキュラムへの再編成」については、「学習の時機性と効果性を重視した時間計画を行うこと」の観点からの篠原（2012）の総合的な学習の時間を核とした横断的な教育課程経営の提案、さらに押田・武井(2014)による指導の重点方法の可視化に向けた振り返り表作成の提案を参照した。さらに、地域と協働した学びを展開する京都府南丹市立美山小学校やコミュニティ・スクールの先進実践校である岐阜県白川村立白川郷学園や滋賀県長浜市立余呉小中学校の取組も踏まえて、ふるさと学習の6年間の学びを体系化した「わたむきカリキュラム」を構想した。

(2) 授業を地域に開き、子どもの「学びの姿」を変える

「学習課題に関わる新たな地域人材が参画し、教員と地域の大人とともに授業を進めること」、次に「地域の大人が真剣に授業に取り組む姿や学ぶ姿を、子どもが間近で見ること」ができる授業を展開することについては、小西（2019）らが主導した「やまぐち型地域連携教育」における実践的提案検証にもとづく知見を大いに参考にするとともに、兵庫県豊岡市、石川県での事例もふまえて、そのような実践を意識的につくり出すし「教員と地域の大人が協働で進める授業」と「地域の大人が参加し子どもとともに学ぶ授業」を構想した。

(3) 隣接する幼稚園・公民館との連携体制を気づき地域連携の基盤を固める

学校と隣接する公民館と幼稚園との連携を密にし、相互で支え合い、補い合える関係をつくるために佐藤（2011）の段階発展論を参照した。鹿沼市の学社融合は、教育委員会事務局内部、学校-社会教育施設の双方で佐藤の「協働」段階に到達しえた実践事例として、現任校の具体的な構想づくりに大いに参考になった。学校と社会教育関連施設が相互補完することで互恵の関係づくりを進め「協働段階」に到達する、学校と幼稚園、公民館を軸にした地域とともにある学校づくりのための推進組織づくりを構想した。

3. 西大路小学校の改善プランの実践

(1) ふるさと学習カリキュラムの再構築

わたむきプランの展開においては、西大路小学校の教員規模、校区の特性等を鑑みて、持続性・効果を重視した取組の開発が重要になる。そのため、すでに取り組んでいて課題の所在が共有されている「ふるさと学習カリキュラム」の改善を実践開発の端緒とした。

令和3年度当初より、西大路地域に関わる各学年の生活科や総合的な学習の時間「わたむき」の単元計画を、今後3年間の見通しで改善し、その活動内容から児童自身が学び、考え、気づくことができるものであるか確認する取組を開始した。この取組を行うことで学年の学習活動の流れを見通し（横の学び）、入学から卒業までの6年間の学び（縦の学び）をつないだ単元計画になるよう、活動内容の見直しと立て直しを学期ごとに進める。協議では、各学年の担当教員が集まり、単元活動内容や今後の進め方について話し合う。設定した単元活動に取り組んだことで児童が身に付けたことや、目的を達成するために選択した地域教材、学習活動に関わった地域人材など成果が得られたものや、今後改善の必要があるものなどを交流してふるさと学習の活動内容の精選と体系化を図った。これらを通じて教員が異動しても継続できる単元活動内容を設定し、活動の内容や目的を知る地域人材が教員とともに活動に関わることで学習のねらいも変わらない「6年間の学びをつなぐわたむきカリキュラム」(図2)となるよう教育課程を再構築した。

また、作成したカリキュラムをもとに、活動に参画した地域の人とも協議しながら、



図1. 効果的で持続的な地域学習を核とした改善プランの構想図

子どもの主体性

を引き出せる学習活動を考えて進めていく。学校と地域が協働して子どもを育てる流れを作り、地域の思いや願いも達成できるようにすることで今後も持続可能な取組になると考えた。

このカリキュラムを基に各学年の「生活科」「総合的な学習の時間」の単元構想図(図3)を作成した。指導の重点や内容・方法の記録、活用したワークシート等も単元構想図に添付する。さらに、活動の実践記録や今後の改善点も書き込みながら、活動状況が全体で共有され、次年度に向けてさらなる工夫や改善につなげていくことができるようにした。この単元構想図は、見通しを持って学習を進めるための「学びの地図」として活用した。

この実践は全教員で活動のアイデアを出し合い、単元構想図を制作する手続きを工夫し、共通理解を図りながら取り組んだ。重要視したのは、児童自身が日常生活や社会に目を向け自らの課題を設定し、探究的な学習を進めるなかで、自己の学びを深めることである。単元における活動内容を①問題の投げかけ→②課題の設定→③情報収集→④整理分析→⑤まとめに整理し、①の活動で地域の上よさとともに課題を投げかけ、③の情報収集において児童自らが地域の方と関わり課題を解決するという学習形態へ学びを変えていくことにした。児童自身が課題解決を進める学びを積み上げ、発展的な学びへと改善を進めていこうと各学年の担任が分担して年間の学習の流れを単元構想図に整理し、

それを補足しながらさらに改善を進めた。

学期末には、単元構想図をもとに教員全体でふりかえりを行った。この場で、各教員が実践を紹介し合うことで、教員同士が地域教材について学び合える機会にもなった。また、地域人材や、地域教材については、地域コーディネーターが人材リストを整理し、教材についてはふるさと学習カリキュラムを総括する筆者が担当した。この学びに活用できるようにすることがねらいであった。人材の高齢化や、平日に参加可能な人材の確保が難しいという弊害も生じたが、地域コーディネーターの聞き取り調査や、後述になる幼稚園・公民館との協働ミーティングで



図2. 西大路小学校6年間の学びをつなぐわたむきカリキュラム

助言をいただくことで問題を解決することができた。

(2) 地域と学校の協働で子どもの「学びの姿」を変える

「人は人を浴びて人となる」(草柳太蔵 2009)。人はたくさんの人と関わるなかで人として生きる力を育む。子どもは大人の学ぶ姿・生きる姿を見て、自分自身で学ぶ姿・生きる姿を習得していく。この理論をもとに「児童と大人の学びの共有」を目的として、地域の大人が子どもに地域の良さや課題を語る授業や子どもとともに「学びなおし」をする機会を設定することにした。

再構築した「わたむきカリキュラム」の活動を中心に、地域の大人が学習に参加して思いや考えを伝えたり、ともに学んだりできる活動を仕組み、大人とともに学ぶ機会を充実させることで、子どもの学びに向かう姿の変容を図る。

令和3年度より地域の大人が教員とともに学びを進める授業を設定するに際し、参加する大人が地域の子どもの学びを担っているという当事者意識を持つこと、また参加する大人が子ども達から元気もらい、学校を近い場所として再認識することを実践のねらいとした。

図4に示すように「子どもと大人が学び合う学校をつくる」ことを目指して「教員と地域の大人が協働で授業を進めること」と「授業に地域の大人が参加し、子どもとともに学ぶこと」という2つの方策を実施し、「子どもと大人がともに学び合い、地域を高め合える学校づくり」を到達目標として設定した。

教員と地域の大人の協働授業では、大人同士の学び合いの機会を生み出すほか、地域の大人が学びの当事者として授業に関わり子どもとともに学ぶ機会をつくった。地域の大人の学びへの参加では、子どもが大人とともに学ぶことで学びに向かう意識の向上のほか、大人の学び直しや学びへの意欲の向上を期待した。地域の大人が関わる授業を行う場合は、図3の単元指導構想図を活用した。

単元指導構想図に育てていきたい子どもの資質・能力とともに、参加する大人側についてもねらいを設定した。

4年 前期 「日野町の豊かな森林＝緑のダムを守るために」単元指導構想図 (30時間)

- 単元目標
- ・日野町のよさ＝自然(緑が豊か)であることを再確認し、緑を守る人々の存在、願いを知り、地域の自然(森林)を守り、これからは大切にしていこうとする想いを持つ
 - ・西大路小学校周辺の自然環境＝森林に関心を持ちそれらを守ろうとする心情を養う
 - ・伝える相手を意識した、わかりやすく効果的な表現方法を工夫し、地域や学年に伝えることができる

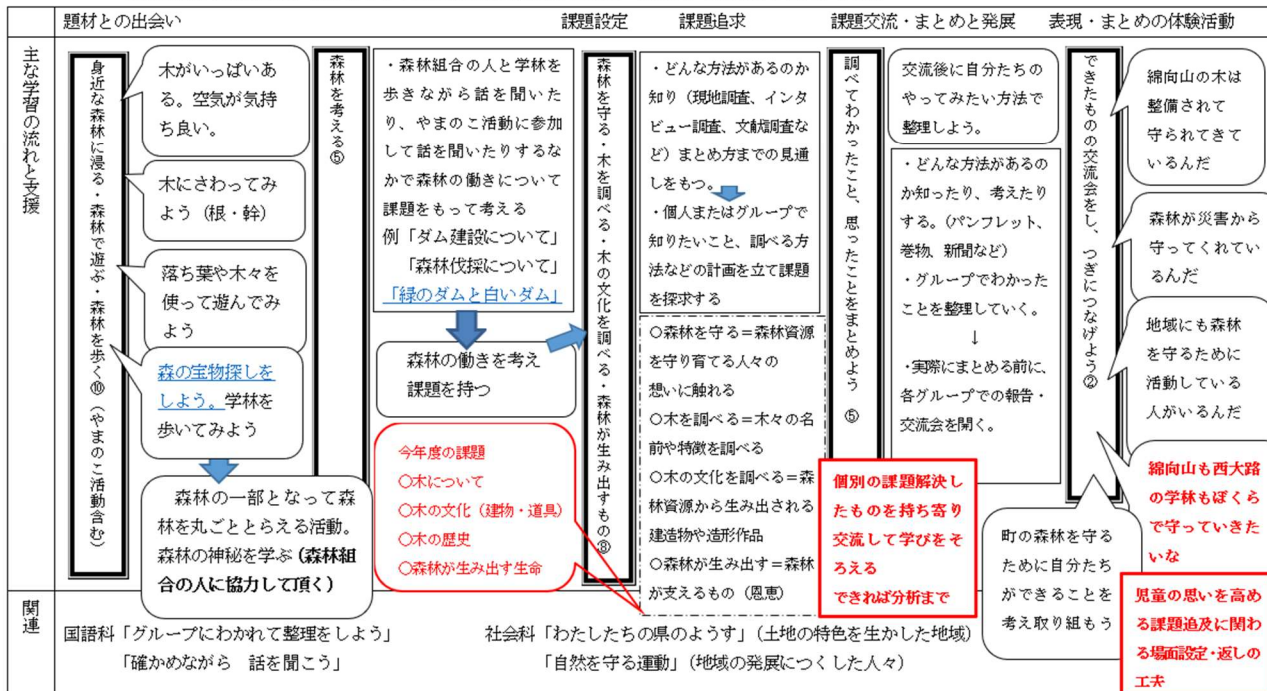


図3. 総合的な学習の時間「わたむき」の単元構想図(4年)

参加する大人が教員とともに地域について語る場合と、子どもとともに授業に参加することで子どもは学びに向かう姿勢を学び、大人も生きる活力を得る場合の2つの方向性で進めているため、指導者として参加する場合は、事前に単元指導構想図をもとに打ち合わせを行い、授業を実施することにした。授業を終えた後には両者ともに感想や意見をもらい次年度への課題として引き継いでいくこととした。

令和3年度の1学期より、筆者が担当する4年生の社会科や総合的な学習の時間、5年生の家庭科の学習活動で地域の大人が参加する授業を実施した。関わってもらおう地域の大人については、地域コーディネーターに協力を求め、参加者を募り、事前に学校に来て単元指導計画をもとに授業の進め方について話し合う機会を設定した。社会科「ごみとくらしについて」の学習には、地域の女性会から3名が授業に参加して、教員とともに子ども達の学習活動を計画し、授業を進めた。また総合的な学習の時間では「日野町の豊かな森林を守る」という課題を解決するために、西大路小学校の学林を管理されている「綿向生産森林組合」の職員が参加した。事前打ち合わせでは、つきたい資質や技能について説明した。学林を児童とともに散策し、木の種類や森林の間伐、野生動物の被害の防止等について指導を進めてもらった。地域の指導者には、自作の資料や教材を準備して説明をする人もいて、子どもとともに教員も、地域で実践している取組や今後も活動を継続していきたいという熱い思いを身近に感じながら学ぶことができた。家庭科「ソーイング1年生」には初めてボランティアとして地域のお年寄りに協力を依頼した。一人ひとりの児童に対する丁寧な見取りや励ましの言葉掛けが可能になり、子どもの学びに大人が寄り添う和やかな雰囲気の中で授業が進められた。

地域の大人が授業に参加する取組を率先して始めた結果、6年生では地域の歴史調査の学習で地域の人に説明を求めたり、3年生では児童自身が地域の人にインタビューしたりする機会が設定できた。しかし単元構想図をもとにした打ち合わせや、授業後の振り返りなどはできていない。2学期の地域の防災士を講師として実施した防災学習は全校生徒を対象に低学年と高学年に分かれて授業が進められたが、地域の防災士との打ち合わせは活動を企画した管理職と実施されていたため、全学年の担任とは協議ができていなかった。

地域の大人に授業に参加してもらおうため、地域人材に詳しい地域コーディネーターに人材発掘を依頼した。ふるさと学習や各教科の学習内容にふさわしい人材に今後も継続して参加してもらえるよう、今年度より新たに加わった人材や連携した社会教育施設や団体は地域コーディネーターが新たな人材マップとして整理した。また、参加者との事前の打ち合わせは、筆者と地域コーディネーターが同席して打ち合わせができるよう、日程を調整した。来年度の活動につなげようと授業の事後協議の実施を考えていたが、参加者の都合もあり難しかったため、意見用紙を配布し、授業に参加して気づいた児童の良さや、気になったこと、今後続けていくうえで改善した方がよいことなどを記入してもらった。

子どもとの学び合いの授業では「学校は遠い存在」と感じる傾向が見られた高齢者に呼びかけ、参加してもらった。参加した人には、他学年の授業や行事への参加も呼びかけ、何度も学校に来ることで西大路小の子ども達が近い存在となるように工夫した。

しかし、令和3年度の大きな課題は「新型コロナウイルス感染症」に関わる感染予防対策と措置であった。人数制限で多くの大人を学校に迎え入れられないことや、調理実習などの食物を扱う活動の中止、大人数での活動の中止など様々な対策を検討しながら実践を進めなければならなかった。2学期当初は緊急事態宣言下で地域の大人と関わり、ともに学び合う機会をもつことができなかった。10月よりできることを見つけながら、授業に関わる交流活動を開始することになった。

(3)「地域とともにある西大路小学



図4. 子どもと大人が学び合う学校をつくるために

校」をつくるために地域と学校の熟議の場を設定する

地域が学校とともにその地域の子ども達を育てる教育に参画していくためには、相互の意見交流・熟議の機会と場の設定が必要になると考えた。具体的方策として、毎月公民館を会場に協働ミーティングを開き、ともに西大路の子どもについて考える機会をつくってきた。公民館だけでなく、隣接する幼稚園の園長や教員にも参加を求め、地域の子どもをともに育てようという共通の願いと目的を持った関係づくりを進めることをこの実践のねらいとした。

令和3年4月に校区の公民館と幼稚園に、今後の活動について話し合う場を設定したい旨を提案した。この話し合いの結果3つの機関が互いに連携し、協力できる関係づくりを更に深めていくために、今年度は西大路公民館と幼稚園、小学校で「協働ミーティング」を開催することになった。このミーティングで今後実施できそうなことや来年度から改善できそうなことなどを話し合い、来年度の活動や行事につなげることにした。また、協議のなかで今年度から実施できそうなことは実施することにした。2学期には協働ミーティングの参加者とともに地域の人にも参加してもらい「西大路の子どもについて語る会」を設定し、3学期には学校と地域で集まって話し合う機会を設定することとした。

協働ミーティングでは、毎月の行事や活動内容に関する相談や依頼、一緒に取り組みそうなことなどを中心に話し合った。回数を経ることで「こうした方がいいだろうな」「こうしていきたいな」といった、お互いの思いや考えを話せるようになってきた。公民館長は「地域の行事に子どもが主体的に参加してほしい」という願いを持ち、運動会の地域との共同開催も望んでいた。公民館長は、児童のふるさと学習や授業にも進んで参画し、3年生の社会科では手作りの紙芝居で地域について説明するなど、教員とともに子どもの学びにも深く関わっていた。幼稚園園長も、小学校の児童と園児との交流の機会を増やしたいという願いを持ち、5年生児童と5歳園児との5・5交流だけでなく、1年生との交流や休み時間に運動場と園庭を開放して園児と児童がともに遊べる機会を作りたいと望んでいた。

令和3年度より実施した主な実践の1つとして、西大路公民館で開催される文化祭に全児童の作品を出品した。公民館で全校児童の作品を展示し、地域の多くの人に見てもらう機会が生まれた。また、現任校支援学級児童が実施した「わたむきマルシェ」では公民館の主査が公用車を運転して支援学級の担任とともに地域を巡回し広報活動に協力した。結果、マルシェの参加人数は昨年度より増加し、支援学級の児童も達成感を味わえた。12月に1年生が実施した「昔遊び体験」でも公民館に来る人に声をかけ、公民館報に参加募集を募るなど協力を得ることができた。幼稚園との交流では音楽会の練習の後、1年生の教室を訪問して交流し、園児からは学校へお礼のメッセージを送るなど、年間を通じて心温まる児童と園児との交流が始まった。

加えて、10月と11月に地域と学校が子どもについて語り合える契機を生み出すために、学校側と地域側の双方で「西大路で育てていきたい子ども」についての熟議を行った。それぞれで開催したのは、前述のように地域との連携・協働体制に課題のある現任校でいきなり両者が集まって熟議の機会を設定しても意識の高まりや具体的な方策を出すことは難しいと判断したこと、地域連携協働活動について知見を持たない若手の教員に地域連携協働活動について研修を行う必要性を感じたからである。学校での協議は10月に実施した。夏の日野町教育フォーラムが延期になったこともあり、県の生涯学習課より講師を招き「コミュニティ・スクール」についての説明を受けた。加えて4名1グループになり、4つのグループに分かれて子どもの良さや地域の良さ、課題となることについて交流した。地域側の協議は11月に行い、いつものミーティングのメンバーに地域の方々が10名加わり、筆者の進行で会議を進めた。3名から4名の4つのグループで西大路の子どもについて良さや課題、

学校・公民館・幼稚園協働ミーティング

期日	〇月〇日() 16時から1時間程度(月末・職員会議後に設定)
参加者	公 公民館館長 公民館主事 学 校長 教務 地域コーディネーター 幼 幼稚園園長 年長組担任
協議内容	(1) 前会議の振り返り(先月の協議内容) (2) 各行事予定より(公民館・幼稚園・小学校) *説明しつつ、今後協働でできそうなことを交流 (3) 今月依頼したいこと 公民館⇒幼稚園⇒小学校 (依頼内容) 公民館行事の活動内容・行事への参加依頼 幼稚園行事の活動内容・5・5交流にて 小学校施設・児童に関わって欲しいこと等 小学校各学年の活動内容・参加の依頼 地域人材の協力について
来月の開催日について	



図5 協働ミーティング協議報告書

これからの夢を交流した。

協働ミーティングの協議内容を教員全体で共有するために、ミーティングの前後には、各担任に聞いてほしいことや頼みたいことなどの聞き取りを行ったり、ミーティングの後で図5のような協議報告書を配布したりした。このミーティングで教員からふるさと学習に関わる講師依頼や教材の資料探しなどの依頼が多く出され、連携することで学びの効力感の高まりが感じられた。しかし「ともに教材について考えていこう」「授業を進めよう」「子どものもつ課題を解決していこう」といった「学びの協働」への意識の変容にはまだ到っていない。

一人でも多くの地域の人に学校の様子を知ってもらいたい、学校の子供達に関心を持ってもらいたい、ともに子どもを育てていける関係をつくっていききたいという願いから、西大路小学校児童の毎日の様子を1枚の画用紙に記録する「ひとこと日記」を製作した。これを公民館のエントランスで掲示してもらった。公民館で西大路小学校の児童の姿を見ることができるとい理由から、多くの地域の人が西大路公民館を訪れるようになったという効果が生まれた。また6年生の防災ポスターや家庭科で製作した食事レシピカードなどの児童の作品も公民館に掲示してもらった。公民館は、地域の人に学校の子どもの学びを知ってもらう接点となっている。学校と地域が西大路の子どもについて話し合う機会を実施することにおいて、まずは学校側と地域側で日程を調整し、西大路の子どもについて語り合う機会を設定した。どちらの協議も十分に語り合う時間が設定できていなかったため、考えを合わせ、具体策を考えるまでの話し合いには至らず、どちらも思いを残しながらの閉会となった。3学期に実施する学校と地域との協議では、この会議で出された意見を共有し、今後の具体策を考えると言う目的のもとで意見を交換する場として設定することとした。

4. 改善プランの初期的成果と課題の検証

「ふるさと学習カリキュラムの改善」と「地域参加型授業の開発」、「公民館・幼稚園との連携」という3つの改善の具体策に基づき、児童の学びの姿、教員の地域との連携・協働体制に関する考え方の変容を検証した。

検証方法として、令和2年度の課題探求期間に実施した児童・教員・地域住民対象の質問紙調査を令和3年度にも実施し、関連する設問の回答結果や自由記述内容を主たる資料として活用した。また、4月より開始した地域参加型の授業や、「西大路わたむき学習フェスタ」、「地域とともにある学校についての教職員研修会」、「西大路の子どもについて気軽に語る会」で行ったアンケートの記述内容や個別の聞き取り調査も活用した。1年間の改善プランの実践を通じて、児童の学びに向かう意識や姿勢の向上、教員と地域住民の連携・協働意識の高まりが成果として現れてきたか、またその成否に影響した要因を検証した。

回収率：このプランの効果を検証するため令和2年度と3年度の10月から11月の期間に教職員、児童、地域を対象にアンケートを行った。令和2年度が教職員14名・児童81名・地域50名、令和3年度が教職員14名・児童83名、地域25名に配布した結果、回収率は令和2年度が教職員100%・児童97.5%・地域80%、令和3年度が教職員100%、児童96.3%、地域100%となった。

(1) ふるさとカリキュラムの改善

3.で述べた通り令和3年度より「6年間の学びをつなぐわたむきカリキュラム」を作成した。大切にしたのは、このふるさと学習カリキュラムをもとにした総合的な学習の時間を実施して、活動内容や教材、協力した地域人材を補足し、学習カリキュラムの素地を作成することであった。内容の多くが前年度までの実践内容を活用したものであったため、ふりかえりの場では来年度からの内容の改善について多くの意見が出た。活動内容を検討し改善した結果、児童の主体的な学びにつながる可能性が見られた。総じて令和3年度に実施したふるさと学習カリキュラムの改善は、一定の成果が出始めてきたと考えられる。

活動内容とねらいが明確になったふるさと学習カリキュラムの活動に取り組むことで、児童がふるさとの良さに気づき、将来の



写真1 公民館に掲示している「ひとこと日記」

地域の姿というゴールを設定し、目標に向かって主体的に学ぼうとする意識と行動の高まりを目指した。「総合的な学習の時間」の活動の見直しと改善を進め、3年生以上の児童が地域の良さについて主体的に学ぶ意欲を向上する可能性が期待できる姿が見られた。指導に関わる活動内容等の課題設定や活動後の振り返りを全教職員が集まり、協議することで教職員同士が学び合い勤務校の地域について関心を持ち、主体的に教材研究を進めようとする意識の向上の成果が見られた。

図6の教職員のアンケート結果からは「西大路について知っている」は約90%、新たに追加した項目「児童に育てたい力を意識して地域学習に取り組んでいる」は約80%の肯定率となった。令和4年度からは6年間の学びをつなげるために、生活科の活動を進める低学年の担任教員、そして自立活動を進める支援学級の担任教員にも参加を求め、改善を進めていく。

カリキュラム・マネジメントを進める上で重視したのは、前述の「6年間の学びをつなぐわたむきカリキュラム」をもとにした、各学年の単元指導構想図を作成する点であった。これをもとに、3年生以上の担当教員を中心に活動のふりかえりを学期ごとに実施することで、来年度につなげる具体を示した構造図の改善と協議が同時に進行することを可能にした。この協議は、各学期に1回から2回、予定通り実施することができた。さらに内容修正や、新たな取組を補足するための検討が必要な場合もその都度集まって協議した。協議を進めることで単元指導構想図は、内容がより具体的になり、来年度にも活用できる資料となった。これらのカリキュラム・マネジメントの実施は、児童の学びに影響したのだろうか。図7の児童アンケート結果の「地域学習に楽しく参加できている」の肯定率は昨年度とあまり変化がなく「非常に楽しい」の割合がわずかではあるが減少している。この結果は活動内容に要因があると思われるが、3年生以上児童の記述事項「西大路でじまんでできる場所はどこですか」の内容が「綿向山のヒダリマキガヤ（天然記念物）」、「大井の水路」、「日野祭囃子」等、昨年度よりも明らかに詳細に、しかも多方

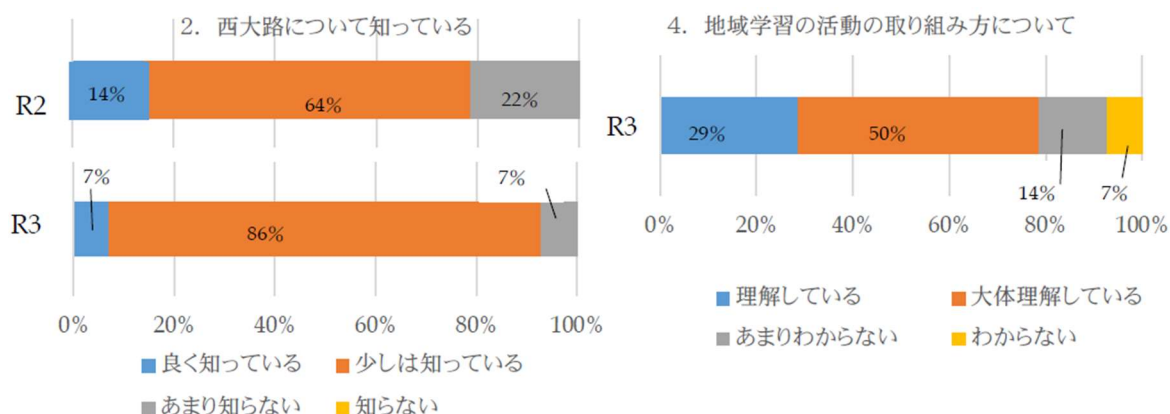


図6 教職員のアンケート結果（西大路について知っている・地域学習の取り組み方）

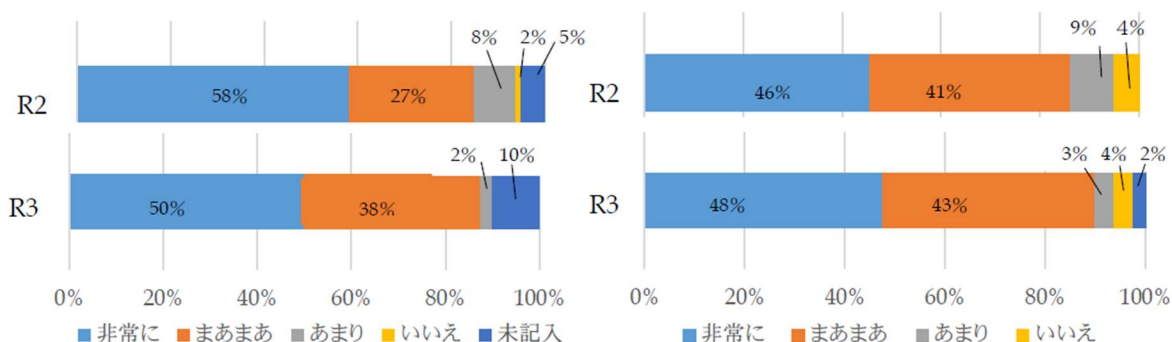


図7 児童アンケート結果（地域学習に楽しく参加できている）

図8 児童アンケート結果（これからも地域について学びたい）

面にわたって記されていたことは、今年度の活動の成果であると考えられる。今後も新たな活動内容や教材を探求しつつ、全学年で学びのふりかえりを進め子どもの学びも教師の活動も継続可能なカリキュラムへと改訂していく必要がある。

また、図8のアンケート結果も「これからも地域について学びたい」という割合がわずかであるが上昇している。この結果は今年度のカリキュラム改善でふるさと学習の活動内容の目的や方法が明確になったことと、課題を解決するうえで、地域の大人が講師として関わり、思いや考えを実際に聞いたり、実際に体験したりする活動が増えていくことが要因と考える。総じて今年度実施したふるさと学習カリキュラムの改善は、一定の成果が出始めてきたと考えられる。来年度以降も改善を進めることで、さらに肯定率を向上させる可能性を期待し、今後も協議を進めていく。

(2) 地域参加型授業の開発

教員と地域の大人が協働で進める授業として、地域の大人の授業参加や事前の打ち合わせをほぼ予定通り実施した。打ち合わせでは、できるだけ「自分の思いや願いを熱く語ってほしい」ことを要望した。この授業を進めることで、児童の「大人になったら地域のために何かしたい」という思いが向上する可能性が期待できる。また、授業に関わった地域人材からも、子どもの学ぶ姿を認め、子どもの意欲を向上させるための改善策を考えようとする姿が見られた。この検証より、地域の大人がふるさと学習にかかわることで、児童の地域に対する関心や、地域について学ぼうとする意欲、そして将来地域に対し貢献しようとする意識が向上することが成果として明らかになった。

地域の大人が参加し子どもとともに学ぶ授業には、地域のお年寄りに参加してもらった。この取組は授業参加をきっかけに地域の異年齢同士がつながるきっかけとなった。

地域参加型授業を実施したことで、子どものアンケート結果からは、昨年度よりも大人と一緒に学んでみたいという児童数が増加した。地域住民の意見は、昨年度よりも「一緒に学んでみたい」という肯定的な意見が増加している。総じて地域参加型授業の実施は児童と地域の大人においてお互いに学び合いたい意識が向上するという成果が見られた。以下、具体的な授業場面について詳細な検証を行ってみたい。

①教員と地域の大人の協働で進める授業

4年生社会科の授業では、ゴミ減量に関わる地域の活動の変遷や各地区の取組、ごみ減量作戦の成果などの説明のほか、「まぜればゴミ・わければ資源」という児童にも分かりやすいキーワードをもとに児童にごみ分別体験をさせるなど工夫が多く見られた。児童からは「リサイクルの方法がよくわかった。楽しく学習できた。今日学んだことは、家でもやっていきたい」「自分の住んでいるところでもやっていることを知った。」という気づき、参加した地域人材からは「子ども達の家庭でもゴミ分別に協力して下さっていることを知ることができてうれしい。親の姿を見て、まねで行動することに自信をもってほしい。」「質問したことに自分の意見をしっかり言える元気な子ばかりでうれしかった。楽しい時間をすごすことができた」「どのくらい理解できたかが気になるのでまた教えてほしい」などの意見を受けた。3年生の総合的な学習「日野のたからを調べ隊」の活動では、一人ひとりが調べたい内容について地域の講師にインタビューする機会を作った。地域の講師が準備してきた資料をもとに話す内容を熱心に聞き、わからないことを質問する姿が見られた。児童からは「聞いてよかった」「本や資料で調べるより詳しくてわかりやすかった」という感想が聞かれた。

さらに3年生では今年度より日野の宝である伝統産業の伝承者から指導を受ける「日野の名人に弟子入りしよう」という活動に取り組んだ。地域の人の思いや考えを聞き、また伝統産業を実際に体験することで、児童からは「とても楽しかった。地域のいろいろなことを教えてもらった。」「祭囃子をもっと教えてほしい。もっと上手になりたい。」「公民館でも活動していると聞いたので、来年は参加してみたい」などの感想を聞くことができた。指導者からも「真剣な目でしっかりと話を聞く姿をみてうれしかった」「自分たちの思いを子ども達に伝えることができた」「この学習から大人になったときに協力してくれる人材が増えるこ



写真2 社会科で防災士に学ぶ

とを願いたい」といった意見が見られた。この活動は3学期に向け、各活動グループで調査・探求活動を続け、学んだことを来年度に学ぶ2年生を中心に他学年に発信する予定としている。

児童の変化はどうだろうか。図9の児童のアンケートの結果をみると、昨年度よりも「ぜひしたい」の肯定率は低い。この原因は昨年度から継続する感染防止対策による地域での体験学習、交流の減少も原因となっていることが推察される。しかし、全体の肯定率は80%を維持している。さらに弟子入り体験を行った3年生では、聞き取り調査から肯定的な意見を持つ児童が増加していることが予測される。この検証より地域の大人がふるさと学習にかかわることで、児童の地域に対する関心や、地域について学ぼうとする意欲、そして将来地域に対し貢献しようとする意識が向上することが成果として明らかになった。コロナ禍での感染予防対策を徹底しての取組であったが、制限が取り払われた今後は、さらに交流の機会を広げつつ、児童の意欲の向上が見られるかどうかを検証していきたい。

②地域の大人が参加し子どもとともに学ぶ授業

5年生家庭科の「ソーイングはじめの一步」の授業に、地域のお年寄りが4名参加した。2時間ずつの授業を2回計画しており、4名のうち2名は全ての授業に参加した。基本的な縫い方の指導からボタン付け、実際の衣類を持ち寄ってのボタン付けとハギレを活用したお手玉づくりまで、5年生と地域のおばあさんが一緒に活動に取り組んだ。作業机は6つあり、おばあさんは4名なので全ての子に関わってもらうことはできなかったが、筆者の説明を熱心に聞き、「ここはこうすればいいですね?」と確認をしながら一人ひとりの児童に丁寧に対応する姿が見られた。さらに「すごいですよ。先生。この子達みんな上手」「家で練習してきたんやね。頑張り屋さんやね」など一人ひとりに励ましの言葉をかける姿も見られた。授業が終わった後で、児童自らおばあさんたちのところへ行って椅子を運び、一人ひとりが「ありがとうございました」とお礼の言葉を述べていた。おばあさんたちからも「今日はとても楽しい時間をすごさせていただきました」「何十年ぶりに子どもたちと触れ合うことができました」「子ども達といたら腰や足の痛いのも忘れてしまいました」といった意見をもらった。

2学期には1年生の生活科「昔遊び体験活動」に、地域のお年寄りが10名来校し、学びに参加した。11名の1年生が3つのグループにわかれてお年寄りと一緒にコマや羽根つき、お手玉などで遊んだ。コマ回しが初めてというおばあさんもいたが、おじいさんやできるようになった1年生に教えてもらいながら、楽しそうに遊ぶ姿が見られた。最後に担任から感想を求められた1年生は全員が手を挙げて「楽しかったです」「また一緒にしたいです」などの意見を発表していた。参加したお年寄りからも「今日はとても楽しかった。」「今日のお昼ご飯はいつもよりおいしく感じると思います」「この子たちが卒業するまで元気でいて見守っていきたいと思いました」などの意見をもらった。担任の教員からも「今日は、いつもなら登校をしづる子も、『おばあちゃんたちが来て遊んでくれるねん』と朝早く起きて登校できたそうです。どの子も最後まで集中して取り組んでいました。とてもよい機会をいただきました。」という感想を聞いた。

5年生の授業があった後日、家庭科の授業に参加したおばあさんの一人から「スーパーで買い物をしていたら、子ども達から声をかけてきてくれた。とてもうれしかった」という話を聞いた。授業参加をきっかけに地域の多世代同士がつながり、また学校から離れていた地域の人が学校を身近に感じられるよう、今後も様々な活動に地域の高齢者を中心に異年齢の参加を仕掛けていきたい。

この地域参加型授業を実施したことで、次の図10の子どものアンケート結果からは、昨年度よりも大人と一緒に学んでみたいという児童数が増加していることがわかる。また、教職員のアンケートからは学校の授業や行事を地域参加型にすることについての気勢は昨年度とあまり変化はない。学校だけで児童の課題や学びを解決しなければいけないという考え方がまだ存在し、地域参加型授業に対し消極的な姿勢が見られる。授業に地域の大人が参加し、子どもの学ぶ意欲が向上したという効力感を得る機会を設定することで、教職員側の認識を深めることが必要だと考えられる。地域住民の意見は、昨年度よりも「一緒に学んでみたい」という肯定的な意見が増加している。



写真3 家庭科で手縫いの基本を教わる

総じて地域参加型授業の実施は児童と地域の大人においてお互いに学び合いたいという成果が見られた。今後は全学年で地域参加型授業を実施し、大人と大人、大人と子どもが教え合い、ともに学ぶ機会をつくることで、両者の学びが高まる可能性が期待できる。

③児童の学びの成果を発信する「西大路わたむき学習フェスタ」の実施

ふるさと学習カリキュラムの学びの成果を地域や保護者に発信し、児童が身に付けた力を検証する機会が必要と考え、今年度も学習フェスタの実施を計画していた。しかし、2学期始めの8月9月は新型コロナ感染による緊急事態宣言のため、交流や訪問、体験活動は全て中止になり、10月から様子を見ながら、地域と交流する学習を進めてきた。11月に児童の学びを発信する機会「西大路わたむき学習フェスタ」を企画し開催した。今年度の保護者以外の地域の参加は、活動に関わった人のみとなった。それでも児童は他学年や保護者、参加した地域の人に対し、自分が学んだことを伝えることができた。

「西大路わたむき学習フェスタ」に参加した保護者や地域の人は、児童の学びに関わった当事者として説明を聞くだけでなく、質問をしたり、内容に対して感想を伝えたりして、その場で児童と交流していた。参加者の意見からは、「声が聞き取りにくいので、教室内にもう少しスペースをとるか、ほかの空き教室を活用したほうがよい」「前半と後半の交代時間に全学年で取り組める内容が企画できるとよい」「それぞれの学年で調査した内容をプレゼンテーションしていたが、学年の段階を追って、発表内容が詳しく整理されており、学びの成長が見られすばらしかった」など、児童の学びに参加する当事者として、ともにこの行事を良くしていきたいという想いが感じられる意見が見られた。教職員からも「来年度は、児童が進行を担当するなど中心になって運営できるとよい。」「カリキュラムを改善したのに時期が遅くなり、困った部分もあった。しかし子どもたちは、自分が学んだことを伝えたいと準備し、生き生きと発表していた。」という意見があった。

児童の学びを他学年や地域の大人に発信する「西大路わたむき学習フェスタ」は、参加した地域の大人にも、児童とともに

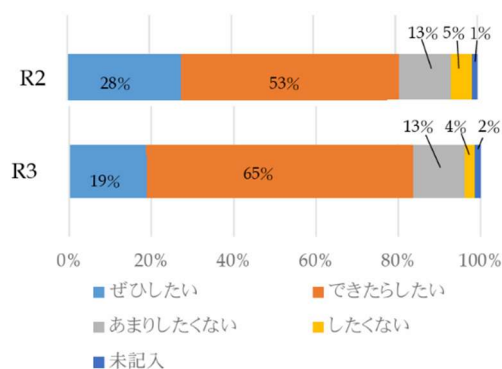


図9 児童アンケート（大人になったら地域のために何かしたい）

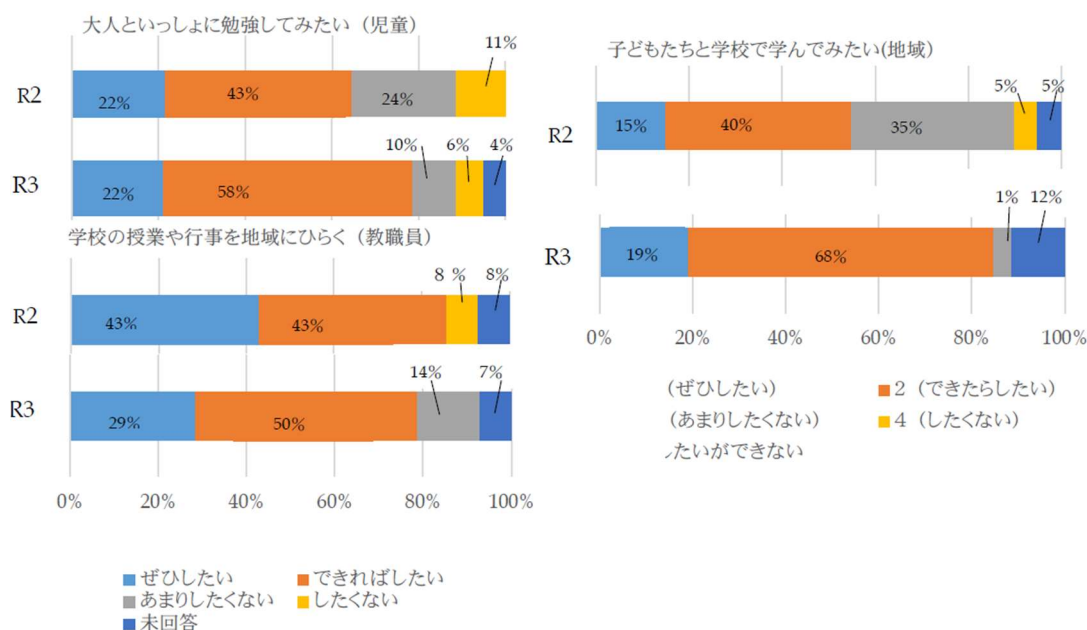


図10 児童・教職員・地域のアンケート結果の比較

に行事に取り組んだ教員にも一定の効果を与えられたと考える。来年度は年度始めより、学校行事やふるさと学習カリキュラムに位置づけ、活動内容や開催時期、運営方法等について教職員全体で再度検討することで、さらに多くの地域の大人が学びに参加し、子ども、教職員とともに、自分の思いや考えを深め合える「大人と大人、大人と子どもの教え合い、学び合いの場」として設定できる可能性が期待できる。

(3) 公民館・幼稚園との連携

公民館・幼稚園との協働ミーティングを中心に、2学期には教職員研修会、地域住民の研修会を実施して教職員の地域との連携・協働体制に対する受容力を高めること、さらに社会教育施設や地域の多くの住民が地域の子供達について関心を持ち、当事者意識を持って子供達を育てようとする意識が向上することを目指した。今年度より開始した協働ミーティングは、今後のコミュニティ・スクール導入も想定し、熟議のできる関係作りと学校運営協議会の役員選出も念頭に置き、相互補完できる関係作りを進めてきた。この協議の結果「西大路の子どもについて気軽に話す会」という地域住民と教職員がともに「西大路の子ども」について話し合う熟議の場を設定（2022年1月19日）することが可能となった。

①協働ミーティングの実施

毎月の協議に全員が参加できるよう行事予定を確認し、日程の調整を図って実施した。毎月実施することで以前よりも思いを共有する関係づくりができてきている。学校行事や授業への参加協力を求めたり、地域や幼稚園からの意見を学校の教職員全体に伝えたりすることが可能になった。今後も継続することで、三者の教育機関がより密接につながる可能性を見出すことができる。令和4年度からは「幼・小・公連携・協働カレンダー」制作に向け、さらに連携を深めていけるようにする。

②公民館を拠点として学校と地域がつながる取り組み

「ひとこと日記」や児童の作品に地域からメッセージをもらうことでさらにつながりを深められたらと考え、感想や意見の記入用紙や西大路小ポストを設置した。ポストに意見が投函されることはなかったが、地域のアンケートや授業の感想用紙等を回収する場所として公民館ポストを活用することで、授業後の意見を集めることが容易になった。公民館長や公民館主事は学校行事に常に参加するだけでなく、地域学習の協力者としても関わった。今後も地域の多くの人が子どもたちに関心を持ち、学校に足を運んでくれるようにするために、公民館を拠点とした交流の場の設定を検討し取り組んでいく。

令和3年度も「コロナウイルス感染予防対策」から公民館行事が大幅に中止されており、公民館長が希望していた西大路学区納涼祭の司会を高学年児童が担当する計画や、地区の運動会の企画委員会に小学生を起用するなどの計画が実施不可能となった。来年度は実施する方向で計画が進められているため、令和4年度の計画に引き継いでいく。公民館を通じて地域と学校が地域の子供を育て、さらに大人が子どもとともに学び、地域の良さを高め合うことを目的として今後も交流活動を続けていく。

(4) 学校側と地域側が熟議する機会の設定

①「地域とともにある学校について」教職員対象の研修会の実施

校内の教職員が地域とともにある学校についての理解をもち、地域の子供を育てるといった共通の目的を持つために、2学期の10月20日滋賀県教育委員会生涯学習課の岩脇俊博主査を講師として「地域とともにある学校づくり」というテーマで研修会を進めた。

まず岩脇主査のプレゼンテーションを視聴し、その後、学校と地域の強みと弱み、西大路の子供の良さや課題、最後に子供達にどのように育ててほしいかをグループに分かれて話し合った。3つのグループに共通していたのは「地域と人を大切にできる子供を育てたい」という考えであった。具体的な方策を考え、意見を話す教職員もいた。しかし、なかなか地域とともに子供を育てるといった考えに対し「十分な理解が得られにくい」「当事者意識を持ってほしい人が参加しない」



写真4 教職員研修会(2021.10.20)

など、疑問を持つ教職員が存在していた。今後も授業や行事等に地域の人や保護者を巻き込む機会を設定しつつ、教職員が地域のひととともに学ぶ手ごたえを感じるような取組を考えていく。

②地域対象の研修会「西大路の子どもについて気軽に語る会」の実施

地域の人々が育てたい子どもについて考える場を設定し、地域の子どもについて見つめ直す機会をもつことで、良さや気になる点を確認すること、そしてこれからどうしていきたいかを話し合うことで、改善の方向性を合意形成することを目的として、2学期の11月19日に西大路公民館で研修会を実施した。

この研修会には、いつものメンバー以外に10名の地域住民が参加した。4名ごとのグループを作り、西大路の子どもの良さや気になるところについて話し合った。地域から見た子どもの良さや課題は教員と共通する部分が多く、良い面では、「素直・あいさつできる・みんな仲が良い」などの意見が、気になる面では「多くの人にもまれていないから競争心が少ない・すぐあきらめてしまう・外で遊んでいない」などの意見が出ていた。また、これから大切に伸ばしていきたいところも「ふるさとを大切に作る子、人と関わられる子」という考えが教員の思いと共通していた。参加者の誰もが自分の考えを進んで語り、わきあいあいとした熟議がなされていたが、設定していた時間が短く、グループ同士が出し合った意見をもとに、さらに深め、具体策を出し合うところまで協議を進めることができなかった。

③学校と地域の熟議に向けて

令和3年度の最後の熟議は地域と学校がともに西大路の子どもについて語ることを目的とした。令和4年1月19日、文部科学省CSマイスター小西哲也氏を講師に迎え学校と地域で子どもを育てる関係作りについて、意見を交換し、思いを語り合う機会を設定した。この熟議の機会に活用すべく教職員のアンケートと地域のアンケートを実施し、熟議のテーマとなる「西大路でどんな子どもを育てたいか」の質問項目から学校側と地域側の意見を比較した。結果(図11)はどちらも「他者への思いやりや優しさを持った人」「社会のルールやマナーを守る人」「ふるさとに誇りをもち、ふるさとを愛する人」を育てたいという意見が多かった。アンケート回答者となった地域の人の

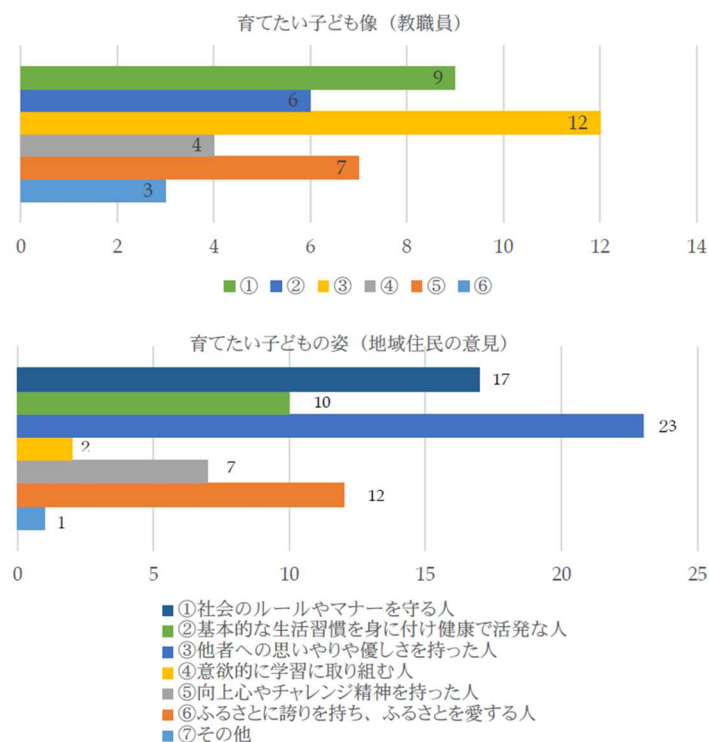


図11 地域と教職員のアンケート結果



写真5 子どもにどのような力を育てたい



写真6 地域と学校から出た意見を整理してまとめる

多くが児童のふるさと学習に直接関わった人であったことも結果の要因となったと考える。このアンケートの結果からは両者の共通点のほか相違点も見えるため、学校と地域が意見を調整し合える可能性が期待できた。実施した熟議では教員も地域の参加者もお互いの意見を話し、これからどうしていきたいか交流することができた。今後もお互いの思いや考えを整理し、来年度につながる具体的な方策を出し合えるような関係作りと場の設定を進めていく。

5. 令和3年度の到達点と次年度への展望

本実践では、「地域とともにある西大路小学校」を目指し、「ふるさと学習のカリキュラム・マネジメント」と「地域の大人が関わり参加する授業の設定」「公民館との連携協働からの熟議の設定」という3つの方策を軸として進めてきた。全体としての成果は、1年目のねらいと計画に沿って改善を進めることができたと考えられる。特に成果が見られた点は、ふるさと学習におけるカリキュラム・マネジメントであったと思う。学期ごとに活動内容を見直し、改善する場を設定することで教職員同士の意見交流の場ができ、子ども達の主体的な学びを目指す教員の向上的な気運を高めることができたと考える。令和4年度からは6年間の学びをつなげるために、低学年や自立活動を進める支援学級の担任教員にも協議への参加を求め、改善を進めていくことを予定した。

この活動内容の改善をきっかけとして、地域の大人が参加する授業においても明確な目的やねらいを持って取り組めた。授業を設定した担任教員からは、児童の学ぶ姿や意欲が高まる効果を実感し、次年度にも継続していくことを希望するなど、地域と協働で授業を進めることに対するモチベーションの高まりを感じることができた。また参加した地域の人からも子どもの学びに対する称賛の声が高まり、学校への理解度も向上したと考える。

今後においてはコロナ禍が依然継続する状況であるため、児童も大人も感染予防対策を徹底しつつ取組を続けていくことが期待される。全学年で地域参加型授業を実施し、大人と大人、大人と子どもが教え合い、ともに学ぶ機会をつくることで、両者の学びが高まる可能性が期待できる。そのために、教職員の学校だけで児童の課題や学びを解決しなければいけないという考え方を払拭し、地域参加型授業に積極的に取り組めるよう意識改善を進める必要がある。授業に地域の大人が参加し、子どもの学ぶ意欲が向上したという効力感を得る機会を設定しつつ、教職員側の認識を深めることが必要と考えられる。

公民館や幼稚園との協働ミーティングでは、3施設の意見を整理し、今後の連携・協働の在り方について協議を進めることができた。このミーティングは、今後コミュニティ・スクール導入後の学校運営協議会の通例会議として実施されることになろう。公民館を通じて地域と学校が地域の子どもの育て、さらに大人が子どもとともに学び、地域の良さを高め合うことを目的として今後も交流活動を進めていく。

この改善研究を進めるなかで、現任校を含め日野町内の小学校それぞれが独自の地域性を持ち、その地域の人材・文化産業等を生かした連携・協働体制を構築できる可能性があることも展望できた。今後も日野町の5つの小学校と1つの中学校がそれぞれコミュニティ・スクールを考える場合において、小・中学校間の連携も大切にしつつ各学区の公民館と連携・協働を進め、大人と子どもの学びの機会を生み出す実践研究に取り組んでいく所存である。

6. 次年度以降の西大路小学校と日野町のCSについて

令和4年度の西大路小学校は日野町の先頭を切って学校運営協議会制度を導入した。令和3年度の「わたむきカリキュラム」を生かし、ふるさと学習を教員と地域人材の力で進めはじめている。令和4年度からは、各学年から公民館に作品を

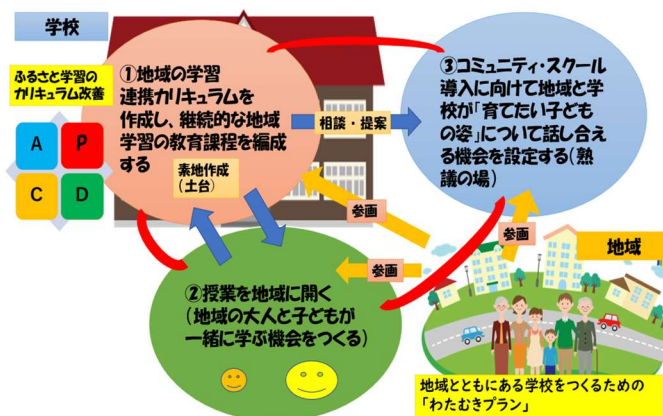


図12 今後の地域とともにある学校をつくるためのわたむきプラン

展示したり、ふるさと学習のまとめの発表の場として公民館を活用したりするなどの動きが見られた。また、令和5年度からは、「わたむきカリキュラム」や各学年の単元構想図を学校運営協議会で提示し、これからのふるさと学習の進め方についてともに協議をしている。

令和3年度より参加を始めた公民館の文化祭では、祖父とともに家で収穫した地域のお米やお餅を販売する小学生の姿や、手作りのミサンガを販売してウクライナ募金を集める姿など、地域の行事に主体的に関わろうとする子どもの姿が見られた。公民館での協働ミーティングも継続されており、学校運営協議会の定例会議の前の事前打ち合わせなど気軽に相談できる場となっている。今までは幼稚園の教諭だけであったが、町内の保育園から入学してくる園児も増えていることから、「ミーティングに保育園の保育士にも入ってもらおう」という声があがり、令和5年度からは近隣の保育園の保育士にも参加を依頼されている。

筆者は、令和4年度に西大路小学校より異動し、西大路小学校とともに学校運営協議会を導入した桜谷小学校に赴任した。この小学校も地域の学校応援団が存在し、学校とともに地域の子どもの育てたいという思いを持つ人材が多数存在している地域である。令和4年度は、ふるさと学習に参加する地域人材リストの作成やふるさと学習カリキュラムの整理を開始した。また、学校運営協議会のメンバーと教員との合同熟議の場も設定してきた。今後西大路小学校で進めた研究知見をもとに桜谷小学校の地域を生かしたつながりづくりを目指していきたい。

参考文献

- 天笠茂 小松郁夫編 (2011). 『「新しい公共型」学校づくり』, ぎょうせい.
- 石川県教育委員会 (2019). 『地域と学校が連携・協働した実践事例集』, 石川県教育委員会.
- 押田貴久・武井鉄郎 (2014). 「へき地小中一貫校における教育内容と教育方法のスタンダード化：郷土を学ぶ「美郷科」を事例として」, 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 30 巻 pp.29-39.
- 貝ノ瀬茂 (2017). 『図説コミュニティ・スクール入門』, 一藝社.
- 木村直人 相田康弘(2019). 『未来の学校づくり』, 学事出版.
- 草柳太蔵(2009), 「午前8時のメッセージ99話」, 静岡新聞社.
- 小西哲也・當山清実(2018). 「コミュニティ・スクールにおける学校支援の在り方に関する一考察」, 兵庫教育大学研究紀要第52巻 pp.101-106.
- 小西哲也 中村正則(2019). 『奇跡の学校』, 風間書房.
- 佐藤晴雄(2018). 『コミュニティ・スクールの全貌』, 風間書房.
- 佐藤晴雄(2014). 『地域と連携・協力した教育の意義』, 初等教育資料2月号 pp6-9, 東洋館出版社.
- 佐藤晴雄(2018). 「地域と歩む新しい学校づくり『社会に開かれた実践のポイント』」, 教育展望4月号 pp11-16, 教育調査研究所.
- 佐藤晴雄(2005). 『学校支援ボランティア-特色づくりの秘けつと課題-』, 教育出版.
- 佐藤晴雄(2002). 『学校を変える 地域が変わる-相互参画による学校・家庭・地域連携の進め方』, 教育出版.
- 佐藤晴雄(1998). 「『学校と家庭・地域社会の連携』に関する実践事例の検討」, 教育制度学研究第5号 pp.209-214.
- 静屋智・小西哲也・池田廣司・美作健悟 長友義彦(2019) 『『やまぐち型地域連携教育』の取組による成果検証にかかる一考察』, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第48号 pp.239-248.
- 篠原清昭 (2012). 『農山村小規模校における特色ある学校づくり-郷土教育の方法と課題-』, 岐阜大学教育学部教師教育研究8号 pp.51-71.
- 東井義雄(1957). 『村を育てる学力』, 明治図書.
- 仲田康一(2012). 「学区との連携・協働」, 篠原 清昭編『学校改善マネジメント』第15章 pp.252-271, ミネルヴァ書房.
- 仲田陽一(2016). 『地域に根ざす学校づくり-子どもが主人公の学校改革を求めて-』, 本の泉社.
- 峯岸由治(2015). 「兵庫県日高町立府中小学校における社会科カリキュラム編成-1978年度版カリキュラムを手がかりに-」, 教育学論究第7号 pp.167-178.